

アジア研究教育ユニット(KUASU)提供 学部共通科目・学部研究科横断科目

「アジアと日本の文化と社会」

日本およびアジアに関するさまざまな分野からの講義をオムニバス形式で提供する学際的な科目です。これまでアジア研究と切り離して行われてきた日本研究を「アジア」という視野に位置づけ、世界の中のアジア、世界とアジアの中の日本についての体系的認識を育てることをめざします。本年度は文学研究科の教員を中心に、歴史、美術、言語、哲学など様々な分野の研究者が交替で講義します。専門知識が無くともわかりやすい講義を心がけますので、研究科や専修の枠にとらわれずに受講してください。

開講日: **毎週木曜2限**

教室: 文学部新館第3講義室

配当学年: 学部1~4年 および 大学院全学年 (他学部他研究科も受講できます)

担当教員: 落合恵美子・平田昌司・出口康夫

日時	講師	テーマ	内容
10月3日	横田 冬彦	日本近世の書物文化	江戸時代最大の貸本屋と言われる名古屋の大野屋惣八の所蔵本(本学附属図書館所蔵)などを素材に、江戸時代の出版文化について講述する。同時代の中国・朝鮮などとの相違についても考えてみたい。
10月10日	中砂 明德	16, 17世紀のヨーロッパ人が見た日本	16, 17世紀にアジアを訪れたヨーロッパの宣教師や商人、そして彼らから情報を受け取って世界地誌を著した知識人が、当時の日本を世界・アジアの中でどのように位置づけていたのかを探る。
10月17日・24日	金澤 周作	明治期日本の「慈善」とウェスタン・インパクト	本格的に開国した日本は、とくに欧米からのさまざまな文物の流入にさらされた。政治制度や経済の仕組み、学問の体系や科学技術などとならび、キリスト教的な「チャリティ」実践もまた、日本にとって新しく、異質な何者かであった。日本でそれまでに培われてきた「慈善」と、外来の「チャリティ」が取り結んだ関係はいかなるものであったのか。本講義ではその歴史を概観する。
10月31日	永井 和	東アジア史の「近世」問題	日本史学界では原始古代・中世・近世・近現代という時代区分が定着して久しい。かつては「近世」という時代区分が日本史特有のものであったこともあった。しかし、近年になって「近世」は世界史の時代区分としても定着しつつあった。しかし、近年になって「近世」は世界史の時代区分としても定着しつつある。この傾向を促進したのがいわゆるグローバル・ヒストリーであり、その背景には20世紀末からの東アジアを中心とするアジアの経済的発展があった。現実の変化が世界史認識をどのように変化させるのか、その一例として「近世」問題を考える。
11月7日	吉川 順子	ジャポニズムを問い直す	19世紀後半から20世紀にかけて、日本文化はフランスを中心にヨーロッパで積極的に受容された。このジャポニズムの動き(主に美術・文学について)を、アジアという視座を導入しながら顧みると共に、当時のヨーロッパの文化的背景にも照らし合わせ、異文化交流のあり方を考察する。
11月14日・21日	吉岡 洋	アジア(あるいは日本)における前衛芸術	「前衛(アヴァンギャルド)」は本来ヨーロッパ的な観念ですが、それが日本やアジアという文脈に移植されてどのように発展を遂げ、どのような可能性をはらんでいるのかを見ていく。
11月28日	田窪 行則	多言語社会としての日本: 琉球列島における二重言語使用	日本は単一言語、単一文化社会とされているが、北はアイヌ語、南は琉球諸語という日本語とは異なる言語が話されており、これらの言語の話者は日本とは異なる文化を持つ。この講義では、主として琉球の言語を中心に多言語社会としての日本について考える。
12月5日	千田 俊太郎	ハングルからみる表記法の諸問題	ハングル、及びハングル表記の特徴を理解するために、はじめに朝鮮語の言語音の仕組み、文法の仕組みを概説した上で、世界の文字の中へ位置付けてゆく。つぎに済州方言の表記法の問題、さらに振り返って日本における文字使用について考察する。
12月12日	木田 章義	アジア諸言語の中の日本語の位置	日本語が東アジアの諸言語とどのような関係にあるのか、また日本語の特徴と言われるものが東アジア諸言語のどのような現象と比べることができるのかをなどを対照的に探ってゆく。
12月19日	小鹿原 敏夫	キリシタン語学にみられる日本語のすがた	16世紀にヨーロッパから来日したキリシタン伴天連は西洋人による日本語研究の嚆矢とされる。彼らは西洋の文法学の枠組みを使って日本語を分析したことで知られる。代表的な文法書としてはロドリゲスの著した『日本大文典』(1604)がある。また辞書としてはローマ字表記で単語三万語を収録する『日葡辞書』(1603)がある。これらはいずれも中世の日本語を研究する上での基本的資料となっている。講義ではこの二つの日本語研究の精華を中心に、同時代の世界各地で出版された宣教師文典との比較を交えつつキリシタンの語学の概要を伝えたい。
1月9日	藤田 正勝	文化の交差という視点から見た日本の哲学	日本の哲学の成立を「文化の交差」という視点から考察する。また「形なきものの形を見る」という点に東洋文化の大きな特徴を見いだした西田幾多郎の思想を「東アジア」という観点から捉え直してみたい。
1月16日	出口 康夫	分析アジア哲学入門	日本の哲学／思想を、広く「アジア哲学」という枠組みの中で捉え直し、分析哲学や非古典論理といった現代哲学／論理学のツールを用いて解釈／再構築する。それが現代哲学の最前線の一つ、「分析アジア哲学(Analytic Asian Philosophy)」である。本授業では、この新領域の世界的動向を紹介するとともに、京大が生み出した哲学的潮流である京都学派の哲学を、分析アジア哲学的な観点から新たに展開していく可能性、即ち「ネオ京都学派」哲学の可能性を探る。

問合せ先: アジア研究教育ユニット支援室

Tel: 075-753-2734 E-mail: asean6.office@bun.kyoto-u.ac.jp